

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その9 —

誇り高き日本人「小川中佐」

高 松 重 信 ・ 著



写真右から、小川少佐、モハンシン大尉（INA 少将）、岩畔機関長、キャニー少佐、国塚中尉、イクバル中尉



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 ／ 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞って勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



初めに

誇り高い小川中佐の史実を記述するにあたり、先ず最初にその活動の場となったインド国民軍の創設に関して些か説明させて頂く。

詳細は当協会の電子書籍ライブラリー・パダウ、題材「嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う」のその4)：日・印の絆（スバス・チャンドラ・ボースと旧日本陸軍の藤原機関）をご参照下さい。

日本の参謀本部は1941年（昭和16年）7月ごろから対英戦争の勃発を想定して、マレー半島における英印軍兵士工作に着手した。責任者として指名された藤原岩市少佐は、タイのバンコクで極秘にインド独立運動を展開していたインド独立連盟のプリタム・シンに接触するとともに、F機関（藤原機関）を結成していた。

私の知る限り近代社会においてアジアの連合(大東亜共栄圏)を唱えた人は清国(現中国)北洋艦隊の丁汝昌司令長官と台湾総督であった児玉源太郎及び今回紹介するF機関の藤原岩市機関長並びにマレーシアのマハティール4代目首相であった。

第二次世界大戦中にこの藤原機関、即ちF機関の活躍がインド国民軍(独立義勇軍)の設立に深く係わり、それがインド独立を早めた端緒になっている。その義勇軍の司令官がスバス・チャンドラ・ボース氏である。

インド独立の父はガンジーであり、ガンジーと同様に熱き念を受けてNo. 2に位置付けられているのが、このスバス・チャンドラ・ボースである。ヒンドゥー語で彼の称号を“ネタージ”と呼ばれており、彼を知らないインド人はいない。(私が触れ合った在日インド人は皆彼を知っていた)

このインド国民軍設立に対する日本軍の支援が現在に至っても我が国とインドとの友好に大きく影響している。(インドの親日原因)

【インド国民軍（INA）の創設とビルマ進軍】

日本軍は藤原機関（F機関）が中心となって、マレー半島の各地にいた英軍などに投降を呼びかける宣伝ビラを撒いた。そして、そのビラを大切に握りしめて投降してくるインド兵（英軍）が後を絶たなかったという。多いときには数百人規模でインド兵が投降し、自らが号令をかけて捕虜収容所に向かったという。誠に前代未聞の現象が出現したのである。

マレーに張り巡らされたF機関によるインド系住民のネットワークが、一方で日本

軍の進撃を支えたのだった。これは余り知られていない史実である。

昭和16年の大晦日、藤原機関長は日本軍に投降していたモハーンシン大尉から重要な申し出を受ける。それはインド国民軍（INA）の創設を願い出るものだった。このINAに参加するインド軍将兵の決断は自身の死を覚悟する他、インドに住む親兄弟の安否も気遣ったうえでの苦渋の決断を要求されたのであった。英軍からみればINAは反逆軍になるからである。

藤原機関長は重大な問題だと思った。要求の中には「INAを日本軍と同盟関係の友軍と見なす」といった条文もある。

しかし、全てを受け入れた藤原機関長は、その足で山下奉文将軍の司令部を訪れ、認可を取り付ける。インド兵を信頼していたのはF機関だけではなく、山下将軍も同じだった。



1942年3月、東京会議からシンガポール・カラン飛行場に帰ってきたモハーンシン大尉と握手、
後ろ姿藤原機関長、右端はラグワン氏

1941年12月31日。インド国民軍（Indian National Army：INA）はマレー半島の片隅で産声を上げた。そして、このインド人待望の国民軍は、シンガポール陥落直後に公然と姿を現すことになる。1942年（昭和17年）2月15日、シンガポールは我が軍によって陥落し、夕方には英軍のパーシバル将軍が降伏文書にサインして戦闘は終結する。

その後、INAは戦時下のベルリンから来日を果たしたインド独立の英雄チャンドラ・ボースが全軍を率いるリーダーとして登場し、更に領土（アンダマン・ニコバル諸島）を所有するINA＝インド国民軍として成長し、日本軍と歩を同一にとり、

母国インパール及びビルマのアキャブ戦線で祖国独立を旗印に掲げ、犠牲的な戦いを英軍に挑むのである。

※著者注；デンマーク＝ノルウェーの入植者このアンダマン・ニコバル諸島を植民地化し、後に英国に売却され、英国の植民地であったが、日本軍が1942年3月その諸島を占拠し、スバス・チャンドラ・ボースのインド国民軍の統治下に於いたのが、現在のインド領となり、インド洋の出入り口となる重要なアンダマン海の制海となっていると思われる

いわくろ 岩畔機関と小川少佐

大東亜戦争でシンガポールが陥落する直前、タイのバンコクで岩畔機関という特務機関が誕生しました。この機関の目的はインド義勇軍をつくってインド独立工作をするのが主な任務でした。ここに小川三郎少佐が配属されてきました。

機関長の岩畔は「謀略の岩畔」の異名をとっていて、陸軍中野学校（設立時の名称は防諜研究所）の設立他、多くの諜報機関の設立にかかわり、また彼は日米開戦回避に奔走したりしていました。戦後は京都産業大学設立者として理事を務めました。

この機関長で豪胆な岩畔豪雄大佐は小川少佐の考課表を見ると「陸士第38期生卒業。序列が尻から二番目。二・二六事件に連座して停職六カ月。」という者でどんなポストに使うべきか迷いました。

そこで夕食の時、小川少佐に聞いてみました。「君は陸士の卒業序列が尻から二番だがあまり勉強しなかったんだらう」。

すると小川少佐は「実に残念でたまりません」と言いました。

岩畔機関長はてっきり勉強もしてみたが不成績に終わって残念だと思っていたところ、小川少佐はこう続けました。

「私は陸士卒業の時、ぜひビリで卒業したいと努めたが、惜しくも念願がはずれて、尻から二番に止まり実に残念無念でした。ビリの卒業というのはなかなか難事中の難事ですね」

と笑って答え、さすがに剛腹の岩畔機関長も呆気にとられたといいます。

大東亜戦争が進んで、インドの志士スバス・チャンドラ・ボースをドイツから迎えてインド国民軍の首領とし、小川少佐(中佐に昇進)はその連絡に任じていました。

小川中佐の勇気ある行動

当時、インパール作戦後のビルマの日本軍は戦勢利あらず、後退に後退を重ねていました。サルウィン河畔に踏み留まっていたチャンドラ・ボースに対し小川中佐は「早く後方の国境山脈まで退かれよ」と言いました。

するとボースは「約100名のインド義勇軍の婦人部隊をラングーン（ヤンゴン）に残していながら男の自分だけがどうして後退できるか」と言いました。

小川中佐は「わかった、私も日本人だ。日本帝国軍人だ。誓って私が責任を以てインド国民軍婦人部隊を救出し、貴方の膝下に連れ帰るから安心して後退せられよ」と言うなり方面軍の後方担当の参謀のところに行き「最小限4台のトラックを融通してくれ」と頼みこみました。参謀は「1台もない」と断りました。

中佐は何とか工面してくれと迫ったが、参謀は「ない袖は振れぬ」と言う。そうしたおり、小川中佐は厳然として以下を言い放った。

【ない袖を振るのが参謀の真の役割だ。ある袖を振るのなら誰でもできる。自分はインドのボース首領に誓ったのだ。ラングーンに残された婦人部隊は日本人の面目にかけても断じて救出すると。今度の大战はあるいは敗戦の破局を迎えるかもしれぬが、たとえどんな到底に陥っても日本人は嘘をつかなかった。どんな逆境に立っても日本の軍人は最後まで信頼できるとのイメージをインドの人たちに残して死にたい。形の上の戦争ではたとえ敗れても心の上の戦争では敗れておらぬ証拠を世界の人々に示すべき絶好の機会だ。4台のトラックはこのため何とかしてくれ】

と熱情をこめて言い放ったのです。



チャンドラ・ボースとインド独立義勇軍の婦人部隊

黙々としてその言葉を聞いていた参謀は何も言わず、どこからか4台のトラックを工面してきました。小川中佐は喜んでこれを受け取ると、まっしぐらに包囲下の首都に駆けつけて無事にインド国民軍婦人部隊の約80名を救出し、ボース首領の手元に連れてきました。

そして退却の戦闘で最も困難とされる「しんがり部隊」を自ら買って出たのが小川中佐でした。退却するインド国民軍たちを安全な地帯まで後退させるため悪戦苦闘しながら、もうこれで大丈夫と思われる地点まで送り届けた。

その後小川中佐は突然、今来た方向に逆行して群がるイギリス軍に突入して行きました。するとマンダレーから南下した英軍機械化部隊の砲撃を受けて小川中佐は戦死しました。昭和20年4月25日。

小川中佐の同僚とした戦ったインド国民軍のキアニー将軍（元少佐）はこう語っています。

「私は日本人を尊敬している。日本人は他の民族と較べてはるかに誠実で信頼できる。この誠実さはインド人の中に伝わっている。大切なことは戦争に勝つとか敗けるとかではない。敗けても裏切らない誠実さだ。インド義勇軍の将兵は小川中佐を、血を分けた兄のように親しく思い、時には徳の高い老僧のように尊敬している。一生忘れない」と涙を流して語っていたという。（ASEANセンター 中島慎三郎）

小川中佐と二・二六事件に連座した大蔵栄一氏は著書『二・二六事件への挽歌』でこのように書いています。

「私達の同窓にこんな誇り高い男がいたと言うだけでも肩身の広い感じがする。たとえ日本の陸軍が減びても、また熊本幼年学校がなくなっても、このような物語だけは後の世にぜひ残しておきたいものである。日本の中にこんな考えの男がいたことを永久に残したいものである」 こういう真実こそ学校で子供達に教えてやりたいものであります。



インド義勇軍と岩畔機関・左端が小川三郎中佐

戦後の元陸軍少将・元岩畔機関長 岩畔豪雄の話

その彼が今もし生きていたら、インドとパキстанは分離していなかったに違いなく、またインドと日本とは更なる同盟国のような友好関係を結んでいただろうと惜しまれてならない。

日本の敗戦と スバス・チャンドラ・ボースの死亡

日本の敗戦により、日本と協力してインド独立を勝ち取ることが不可能となった。ボースは東西冷戦を予想し、イギリスに対抗するためソ連に協力を得ようとした。しかしソ連へ向かおうとした時、台湾の松山飛行場で搭乗していた九七式重爆撃機の墜落事故により死去した。



スバス・チャンドラ・ボース (Subhas Chandra Bos)

彼の臨終の言葉は 『インドは自由になるだろう。そして永遠に自由だ。』

ボースの遺骨は東京都杉並区の日蓮宗蓮光寺で眠っている。

インドでは、スバス・チャンドラ・ボースは生きているという噂が長く語られ、政府が調査団を組織して生存の可能性がないことを確認し、報告書も作成した。

しかし、近年実施された3度目の報告書では、台湾での死亡と日本での埋葬に関して「確実とはいえない」という内容となっており、再び議論を呼び起こしている。この件に関してボースの遺族は、報告書の内容に批判的な立場を取っていると伝えられている。

その後、蓮光寺には、インドのプラサード大統領・ネルー首相・ガンジー首相などが訪問しており、その時の言葉も碑文として残されている。



日蓮宗蓮光寺にあるボーズの胸像

結び

歴史を回顧すれば、国家民族にとって『独立』は何物にも替え難く貴重である。しかし、この独立には民族の血が多く、且つ悲惨に流れている。従って、この闘争過程で結びついた友情と信頼ほど強固な絆はない。

読者の皆様方は、この粗文を読まれて、我国とインドとの独立を巡った固い絆とインド独立の父スバス・チャンドラ・ボースの偉業を知って頂いたと思う。

私は、凡そ80年の苦闘の歴史を持つインド国民会議派、スバス・チャンドラ・ボースという英雄、ガンジーという聖雄、ネルーという指導者、そして、これらの人々に率いられたインド青年が、尊い犠牲によって輝かしい独立を勝ち取られたことに對して、心から敬意を表したい。

特に、この光榮ある独立を一日も早く到来せしめるために、日本と手を組み、印緬（インドとミャンマー）のジャングルで死闘し、日本の敗戦に殉ずるように台北の上空で散華したスバス・チャンドラ・ボースと、彼が率いたインド国民軍、これを助けた我が日本軍が、どのように活躍したか、これがインド独立をどれほど早かに

したか、また、その過程での固い絆が戦後の両国の信頼と友情につながったかを、現在の日本人が知らなくなってしまうのではないかと危惧している。

第二次大戦は確かに、我が国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。

私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人がいかなる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

今後、必ずや日本とアジアの共同帯が作られるであろうと思うとき、過ぎし時代に、戦争という過酷な事件のなかで、我が国の若人が、インドと、ベトナム、ミャンマーと、インドネシアなどの若人と力を合わせ、若い情熱を燃やし、独立の理想に向かって、突き進んで行った光景が臉に、それとダブッて浮かんでくる。

また、この我が国とインドとの固い友情と信頼は、今後、我が国が如何なる展開を為そうとも、我々日本人が忘れてはならない両国の重要な絆であると確信している次第である。

なお、本奮戦記は下記文献から参考及び引用していることを付記する。（おわり）

2022年7月6日

高松重信

参考文献

保守の会会長 松山昭彦氏『さくらの花びらの「日本人よ、誇りを持とう」』Ameba（株式会社サイバーエージェント）

国塚一乗著『印度洋にかかる虹』1-239頁、光文社、1958年12月

野口省己著『回想ビルマ作戦』1-314頁、光人社、2000年1月

岩畔豪雄著『昭和陸軍謀略秘史』1-346頁、日本経済新聞出版本部、2015年6月

筆者略歴

たかまつしげのぶ

高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ10

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う
＜その9＞—誇り高き日本人「小川中佐」—

高松重信 著

2025年5月1日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-09-6 C1810

©高松重信 2025